
愛おしき貴女が為、この身を捧げん

日野

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛あしき貴女が為、この身を捧げん

【Zコード】

Z0504

【作者名】

日野

【あらすじ】

いつ、どこから来たのかは分からぬ。

それでも、私の棲みついたこの図書館だけが私を作っているそんな気がしていた。

それなのに、そんな私の場所に一人の魔女が入ってきて・・・？

私の前作「魔女と吸血鬼、初めての出逢い」の続きとなつてあります。

それを読まなくとも楽しめると想いますが、良かつたらそちらもどうぞ。

(前書き)

この小説は私時吳が脳内で考えた一次小説となつております。

読まれるついで共感できないところがあると思いますが、そういうのが大丈夫という方はお進みください。

いつから私はここにいたのだろうか

何でわたしはここにいたのだろうか

いつたいワタシは何なのだろうか

無造作に並べられた知識の遺産は答えてくれない

私の声は

ただ

書庫の暗闇へと消えていった

いつから私はそこにいたのか、正直覚えていません。

気づいたら私はそこにいて、当たり前のようにそこにおかれていた本を読みふけっていました。

何故、そうしていたのだろう。正直自分にも分からない。

他に行き場所はあつたんだと思うけれど、私がそこを動こうとしたのがただだけ。

この本の所有者は私に対して何の接触も諂つてこなかつたし、その妹さん？もこの図書館には何の興味も満たさなかつたみたいですね。

だから、私はこの暮らしを続けていられました。

しかし、そんな平穏な生活は長続き、まあ私の論点からですけれどしなかつたわけです。

『・・・埃っぽい場所ね』

見知らぬ声を聞きながら私は目を覚ました。

その声に続いて、

『まあ、普段私は本なんて読みもしないしね。珍しいものがあるだけ集めて後はどうにでもなれ みたいなのがこの紅魔館の特徴でもあるしね』

聞きなれたこの館の主の声がする。

誰か客でも連れてきたのだろうか…私が知る限りそんなの聞いた覚えが

『じゃあ、ここはこれから貴女のスペースになるわけね まあ、散らかっているけれどそこは勘弁して頂戴』

『まつたく、せっかくできた友人に仕事をやらせるなんて…貴女お抱えの妖精さんたちは仕事しないのかしら?』

『そうね、正直使えない娘たちが多いのが現状ね。ほとんどは妹の

『世話に追われひきつづいて、本当に優秀なメイドでもいればいいのだけれど……』

『まあ、じょうがないわね。とつあえずいいの場所を整理しながら使わせてもらひことにするわ』

…………えつ？ 今何て…………？

『ここは私の場所…………ここに住むところとは今棲んでいる私を追い出すと…………こいつとへ……』

『やうしたら私はどうすればいいの？』

『…………か知らない私はどうすればいいの？』

『そんなの嫌過ぎます…………』

『…………』

『あらあら・・・そういえばいたわね』

「え？ ・・・ あ？ ・・・ ナヤシ~~~~~」

思わず大声をあげて飛び上がってしまい、そのまま自分を載せていた本棚ごと落ちて行ってしまいます・・・・・主と客人の方へと・

「おひる・・・。」
「かしへもまあかしほ、七曜の魔女
さんへ。」

・・・ 言われなくともやらなければ知識を呑む前にその副産物に呑みこまれちゃうわ

その客人、力の流れを見たところ彼女は魔女でしょうか・・・とりあえず魔力を収縮させてこちらに向けてその塊を・・・つてそれだと私も巻き添えじゃないですか・・・!!

自分の身にかかりつのある危機に今更ながら気づいた私は急いでその場を離れようと羽を伸ば

「…………流れゆくその物質たちよ、その動きを消しその場に身を鎮めなれー」

その言葉とともに本たちに強烈な力が加わりその場所から地の上にその团体を沈めてしましました。

そしてその上にいた私も・・・

「えつあつ・・・・・ひやあ・・・・・」

・・・どうやら魔女が使ったのは重力関連の魔法でしたみたいで。空を飛ぼうとした私もその力を受けゆっくりとではありますが、降下してその本たちの群れの上に上手に降り立つてしましました。

「・・・ふつ、こんなものでいいかしら紅き瞳をもつ吸血鬼のお嬢様?」

「うーん、やつぱり貴女の力は素晴らしいものね、パチュリー・ノーレッジ。高貴なる私の友人にふさわしいわ」

「それより、貴女こうなるの分かつていてわざとほつといたでしょ

「…」ここまで来て私を試そうとしていたのかしい、レミコア・スカーレットへ。

「私としては友人にはもつと気楽に呼んで欲しいものだけれど…。
まあいいわ」

「そう…で、これはなんのかしら？」

「ああ、それはなんかいつの間にかこの図書館に棲みついていたの
を私がそのまま放置していたのだけれど…！」

「全く迷惑なことをしてくれるわね…」

「えっ…ちょっと交渉の余地はないんですか？」

「すみません、私の人権は…」

「…まあ、いいじゃないの。一緒に仲良く住んでみたら？ きっと
何か面白い運命になるかもしないわよ？」

そう言いながら吸血鬼の主は帰つて行つてしまします・・・残された私はどうすれば・・・というよりできれば私を睨まないでいただきたいのですが・・・

「ちょっとレミコア・・・・・・ふう、じゃあどうしようか小さな小さな悪魔さん」「

やつ言いながら近づいてくる魔女。

私は持てる力を振り絞つて伸ばされるその魔手から逃れる。

振り切ることに成功した私はそのまま空中に飛翔し、声の届くそなぎりきりまで後退してみる。

「・・・何故初対面であるのにそのような露骨に嫌そつた態度をするのかしら?」

そう魔女は首を傾げてくるがそんなのは知らない、私は・・・そつ、自分の居住場所を奪われようとしているのだ。

「」か知らない世界で、ここだけが自分の拠り所だと信じて暮ら

して見た。

それなのに、興味半分でここに立ち入ってきた貴女にそのような軽い口をたたかれたくはなかった。

「・・・私はここから絶対に立ち退きませんから」

だから、彼女に告げる。

決意の言葉を。

誰からも触れられる」とのなかつた私だけの城を守るがために。

「私は何も退けとは」

「うぬやこりるをこりるをこーーーみんなそう言つて私のそばに近づいて、そう言つて笑つて言つて、結局みんな私のもとからすべてを奪つていくんですね？貴女もやつやつしてするんでしょ？」

言ことすぎた、そつ思つ體すらありますませんでした。

勢いに任せて自分の中にあることないことをみんな口に出してこつてしましました。

それでも尚、魔女のことを鋭く睨みつけて……私は何を思つていたのでしょうか……。

兎にも角にもその言葉を静かに聞いていた魔女は

「そう……それなら一回返かせてもらつわ……また、来るから」

そつ言い残し図書館を後にしたのでした。

そんな彼女の姿を見て優越感に浸っていた私。

なんだつたのでしょうか・・・。

日が明けて、魔女は宣言した通り私の図書館へとやつてきました。

そして、私のことなど気にもかけないようなそぶりを見せながら本を読み続けたのです。

私はそんな彼女の姿が疎ましく、しかし自分の力の無さから彼女を追い出すことができない私自身を恨めしく思いました。

彼女がこの場所を嫌になるように、と書物を読んで培つた知識を総動員して罠を張り巡らしても彼女はそれについて何一つコメントせず、いつもと変わらないようにして本を読みふけるのでした。

そんな彼女の態度すら私には、「れぐら」のことしか貴女はできないの? そんなに本を読んできて、悪魔のくせに、その力を使うこと

もなく私に勝とうだなんて・・・・・そんな風に聞いられてな
りませんでした。

私の心は荒んでござました。

魔女が私の空間に入り込んできただから向年もの時が過ぎました。

近年、魔女は館の主に連れだつて夜な夜な出かけていふらし。

なんでも主の将来をかけたひと勝負を手伝つてござらし。

私としては、そうして外に出て行ってくれているおかげで図書館の周りをうろち歩かれないで済んでいたので助かっていた。

その作業も二つは終わるであろうが、その終わるまでの束の間の平和を私は楽しんでいた。

楽しかった・・・・・・・・・・のだろうか・・・・・・・・・・

ふと気がつくと魔女の姿を捜している私がいました。

ふと見ると魔女がここに来た痕跡、あるはずもないその痕跡を必死に捜している私がいました。

今までずっと私は独りでいたのに、一時独りでいなかつただけなのに、いざ独りに戻されると淋しい自分がいて・・・もう訳がわからぬ感覚に襲われました。

香才変わらぬ日々が過ぎて・・・・・・そう思しながら本を手に取った

その時だった。

屋敷の中が突然慌ただしく動き出し、けたけたしい音がすべてを包み込む。

好奇心に負けてその音がする方、玄関の方へと向かうと館の主が何かを抱えて日に負えなくなるほど速度で走りこんでくる。

抱えていたそれをぼんやりと見つめると、抱えられていたものは胸のあたりを深紅色の、絆をつなぎとめる証でもある血でぐつしょりと濡らし、ぼんやりとした視線で虚空を見つめ続ける魔女の姿。

「何をぼんやりとしているの……図書館へ行つてありつたけの医療系の書物を私の部屋の中へと運んで……そこにはいる門番、やこの小悪魔に同行して……」

「「は、は」」

溢れ出るそれを肌で感じながら私と門番は共に走り、図書館へと向

かう。

「・・・お嬢様方大丈夫でしょうか・・・」

門番がそう話しかけてきたが・・・・・私に聞かないでください・
・・・・・!!

・・・結局魔女の命は助かつたものの彼女が生まれ持ち患つており、
彼女自身の魔力でその症状を抑えていた喘息だけは、相手の吸血鬼
の血の効力のせいかその症状が悪化してしまい、彼女を外へと出か
けさせることのできない体へと変えてしまいました・・・。

それはあれなんですが・・・・・・。

「・・・だからてなんで毎日のようにテレヒ来るんですか!! 体調悪いんですね?」

いつものように数多くの本を選び出し、埃のまみれた部屋の中でもいつも変わらず読書を続ける魔女。

「本でも読んでいた方が気が紛れでいいのよ」

「や、魔女はいつもと同じ感じで私を睨む。」

「私そんなに変なことしてこるかなあ・・・・。」

「・・・・。」

「リリは埃っぽいからお体に触ると黙ったんですね?」

つい語句が強くなりがちだが思いを一応は伝える。

「これぐらことはべ、別にどうしたことなにわよ

対する魔女の返事もそっけない。でも、これでもましな方かもしない。

魔女が変わつていったのか、私が変わつてしまつたのか、どちらも変わつてしまつたのか、実はどちらも変わらずにそう考へることすらがれでしかないのか・・・思いは尽きる」となく私の心をゆさ

ドンッ!!

「えつ?」

私の目の前で人々の知識の遺産が崩れ落ちてくれる。

「えっ！？あっ…………」

情けない声を聞きながら私の視界が真っ暗に

「まつたく・・・世話かけるんじやないわよ」

目の前に魔法壁が精製され、私の体を守ってくれる。

本たちはそれに阻まれて、音もなく崩れ落ちる。

そしてその後ろで・・・

ドスンっ

静かに何かが崩れる音がした。

「えつーー？」

私は急ぎ倒れたパチュリー様のもとへと駆け寄ります。

「・・・無理させんんじや・・・ない・・・わよ」

「パチュリー様！パチュリー様！？・・・お嬢様！美鈴さん！誰か！誰か来てください！ー！」

頼るあてもなく、私は図書館を飛び出す。

折よく一人の妖精メイドを見つけ、息も絶え絶えに看護を呼んでもらひ。

妖精メイドが来るまでの間図書館に戻つてパチュリー様の様子を見ている私でしたが、息も絶え絶えに私の方を、そしてその先にある虚空を見つめ続ける彼女の視線があまりにも痛々しく、そんな彼女に不注意から酷使させてしまつた私が何の支障もないということがとても申し訳なく・・・・もう何と言えばいいのかがわからな
い。

やがて彼女はメイドたちの手によつて部屋へと運び込まれていつた。

彼女の部屋へ行く勇気など私にはなく、もともとは静かな図書館の中には私と何故だか知らないがお嬢様が残された。

「・・・お嬢様はどうして残られたのですか?」

「そう訊ねた私にお嬢様は優しく微笑んだ、のかな?」

「そう・・・ね、パチエがここに残つて欲しそうな顔で私を見てきたからかしら?」

「えつ？」

「彼女、貴女のことがとても気に入っていたみたいで、つと貴女のことを見ていたみたいよ？」

「そんな」

「ことない……といつ嘗葉は何故だか出てこなかつた。

それを嘗葉は、なんだか本当に「そんなことない」ような気がしてくるから……。

そんなことを悶々と考え続ける私が、どうおもしさかたかわからないうが、お嬢様はクスリと上品に微笑んだ。

「フフ、ああ」めんない。でも貴女のその態度を見ていると、パチエが気に病んでいたことがよくわかるわ」

「えつ？」

「……貴女は長い」と独りでいたから相手との接し方が分からなかつただけだと思うの。彼女も言っていたわ、『どうやって接してあげればいいのかが分からない……貴女だったらどうするかしら

？』 つて・・・まあ、私にもそれは分からぬのだけれど・・・少なくとも貴女は独りじゃないわ。私の友人が大切に思つてゐる、それだけで私にとつては大切な客人よ』

「・・・お嬢様」

「さあ、パチエの所に行つてあげなさい。彼女恥ずかしがり屋さんだから貴女が行くことが分かつたらきつと隠れちゃうわよ？」

そう言つてお嬢様は動くに動けない私の背中をそつと優しく押してくれる。

従者（？）としてそのような行動はどうかと思うのだが、ここはお嬢様のご厚意に甘えさせていただきて私はパチュリー様のもとへと向けて駆け出して行つた。

「貴女の先に待ち受けている運命に僅かばかりであろうとも幸があらんことを」

そう、告げるお嬢様の弦を後ろに聞きながら・・・・・・・。

部屋に着いたのはいいが、どうやって中に入ればいいのかが分から
ない。

気づけば人の部屋にはいるのもこれが初めてなわけで、どうもなん
か変な気持ちになってしまつ・・・何故でしょうか?

そういうしていたらパチュリー様は隠れてしまつ・・・って何から
? 私から?

自分の中でもた何かが渦巻いて止まらなくなつてしまつ。

まずい、ここでこんな爆発したら

「ゴンシッ！」

「……痛い……つてパチュリー様！？」

「えつあつ……小悪魔……？ なんでこんなところにいるの？」

えつと状況は、私がたまたまいたところが扉の目の前で、紅魔館の扉は外からひくタイプの扉で、そうこうしているうちに突然パチュリー様が扉を開けたことによって私のおでこにクリーンヒットしつていうそれだけなんですけれど……。

「……とりあえずパチュリー様のお見舞いに来たわけですけれど……逃げ出そうとしてました？」

パチュリー様の恰好を見て訊ねる。

明らかにこれは病人の恰好ではない。

「えつとまあ……レミィが来ないからきつとなんかやらかしていなあ……と思つて一応対策しといたんだけれど……無理だつたみたいね」

「・・・ですね」

「・・・まあいいわ、中に入りなさいよ」

「えつ？」

「ここでパチュリー様はいつも睨み方をする。

「お見舞いに来てくれたんでしょう？」

「は、はい！？」

彼女に促されるまま、私は初めて他人の部屋に入つて行きました。

「・・・」
「リリがパチュリー様のお部屋・・・」

「あんまりじうじう見ないでね」

パチュリー様のお部屋はとにかく本がいっぱいありました。

家具とかそういうものはとても質素なのですが、他の物を一切省いて代わりに本がどんづ！…とあるそんな感じで、小型の図書館みたいな感じでしょうか？

「・・・お土産もなく済みません」

急いでいたとはいって、今更ながら自分の気の利かなさが嫌になる。

「気を遣わなくともいいのよ、どうせほとんど来る人たちのお土産なんて持つておやしないんだから」

その言葉に私は疑問符を浮かべる。

「へへ、でさー！」
「置いてあるお供せ物、お花束は？」

「ああ、それは美鈴。なんでも自分の花畠で咲いていた花をサクッと切って持つてきただらしいわ」

「どうですか・・・」

あの門番さんそんな場所持つていてるんだ・・・といつより仕事と同時にできるのでしょうか？そんな疑問が私の中を渦巻いた。

・・・・・それよりも。

「・・・先程はすみませんでした」

「ん、何が？」

「えっと・・・私の不注意でパチュリー様をこんな目にあわせてしまってムグツ！？」

「それ以上はなし」

パチュリー様の人差し指で私の脣がそつと塞がれる。

「貴女が何をしたとしてもそこで自分の力をわきまえず人の為に力をふるつた私自身が今回の責任よ、貴女に一切の非はない・・・・・とは言えないけれど」

その言葉には有無を言わせぬ力がこもっていた。

私はその言葉に逆らえず、言葉を続けるのをやめざるを得なかつた。

「私は、貴女が無事でいられるならそれでいいわ」

ゆつたりとした、しかし確かな声でパチュリー様は告げる。

その声を聞いたからこそ、私は勇気を振り絞つて告げる。

「パチュリー様・・・今までみません」

「だからそれは」

「私は、今まで自分以外の方と触れ合つ」とはりませんでした。いつからあの場所にいたか覚えていません。ですが、それ以前の記憶が大変悲しいことぐらいは分かります。私は自分自身の過去の影に怯えてちつとも前に進もうとしていませんでした」

「…………」

「パチュリー様、どうか私を貴女の傍につかせてください。私などの小悪魔では貴女のような巨大な力を誇る魔女には到底敵うことはできませんがそれで……も？」

話している途中の私の顔がパチュリー様の膨らんだ……その……はい、胸に埋められてってちょっと苦しいです！！力を緩めてください……！

「……馬鹿ね、そんなこと今更気づいたの？私はとっくに貴女の、小悪魔の魅力に気づいているわよ」

「えつ？」

きょとんとする私の顔を胸から引き揚げてパチュリー様の顔の目の前に持つてこられる。

「私は貴女を選んだの。それは変わらない事実なんだからそこは自覚していくよね」

「…………」

「貴女の笑顔・・・初めてみるけれど可愛いじゃない。いつもそういう笑顔でいて、私の傍にいて・・・貴女自身を大切にして」

「・・・」

「契約という形で貴女を縛ることはしないわ。自分の意思で考えて、分からないうことがあつたら」

教えてあげるから・・・そう言いながらパチュリー様は泣きじやくつてしまつた私の頭をいつまでも撫でて下さつっていました。

「・・・パチュリー様、紅茶が入りました」

「ん、そこに置いといて」

「分かりました」

「今日も、いつもと変わらない一日が始まります。」

パチュリー様がお読みになるその時間をお邪魔しないようにしながら私は新しく入ってきた書籍の整理を始めます。

いつもと変わらない、そんな日々ですけれど何でしょうか・・・一日一日がとても温かい、そんな気持ちになるのです。

さて、今日はどんな本を捜しましょうか？

この幻想郷には、どんな物語があるのでしょつか？

一人気ままに捜すのもまた楽しいでしょう

友人とわいわい搜すのもまた楽しいでしょう

同じ本を何度も読んでもいいかもしません

気の向くままに手に取った本を読んでもいいかもしません

本を読んで

また続けるのは

あなただけの権利なのですから

(後書き)

ご拝読ありがとうございました。

改めて、時々です。

今回の作品は私の処女作品の続編ということで、多少緊張しながらも仕上げました。

気づけば初めてその作品を投稿してから1年、時がたつのは早いものです。

今回の作品のテーマは「居場所」です。

生きようとするならばそこに居場所が必要です。

しかし、それを得るために個人の努力が必要だと思います。

周りに認められて初めてそこに居場所が生まれる・・・そんな関係がいいな、とか思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0504j/>

愛おしき貴女が為、この身を捧げん

2011年10月5日15時41分発行